HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アプロディシアスのアレクサンドロス 『運命について』日本語訳・注（Ⅰ）
Author(s)	近藤, 智彦; 杉山, 和希
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 142, 1(左)-32(左)
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54951
Type	departmental bulletin paper
File Information	02_KONDO SUGIYAMA.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学文学研究科紀要　142　（2014 年 3 月）抜刷

アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』日本語訳・注（Ⅰ）

近　藤　智　彦
杉　山　和　希

北大文学研究科紀要 142 （2014）

アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』日本語訳・注（Ⅰ）

近藤智彦
杉山和希

アプロディシアスのアレクサンドロスによる
二皇帝宛の『運命とわれわれ次第のものごとについて』[1]

【序】

Ⅰ［164.3］この上なく偉大な皇帝であらせられるセウェルス陛下とアントニヌス陛下[2]，願わくば私みずから両陛下のもとに参上し，謁見してご挨拶を

【方針】

・本訳の底本としてはSharplesを用いた（文献表記については末尾の【文献】を参照のこと）。精確には，Sharples: 179–212に複写されているBrunsのテクストに，Sharples: 235–271の指示に従って多くの修正を加えた読みである。なお，Sharplesの読みに基本的に従ったテクストは，簡便にはZierlおよびNataliに見ることができる。

・段落分けについても，基本的にSharplesの英語訳に従った。

・章区分をⅠ，Ⅱなどのローマ数字で示すとともに，各段落の頭にBrunsの頁数・行数を［164.3］のように入れた。なお，【序】などの見出しは，Sharples 2001: 523を参考にして訳者が付加したものである。

・皇帝への献辞を含む冒頭の第1章と結尾の第39章のみ敬体で訳出し，他は常体とした。

・底本と異なる読みを採用した場合のほか，底本が諸写本と大きく異なる修正案を採用している場合も，注に記した（siglaはSharples: 231–234による）。

・注については，先行研究（特にSharplesとNataliの注釈）に負う部分が大きいが，特別な場合を除いてどの文献に依拠したのかを一々記すことは控える。

【注】

[1] 底本は「とわれわれ次第のものごと（καὶ τοῦ ἐφ᾽ ἡμῖν）」を欠いているが，Thilletの報告

申し上げ，両陛下から賜った数々の御厚意に感謝の意を表したかったところです。私は要請したものをすべて，私がそのようなものを求めて受け取ることが正当であるという証と合わせて[3]，いつも拝受してきたからです。しかし，みずから儀式に参加して神々に[4]犠牲を捧げることができなくても，どこからでもあらゆる場所で犠牲を捧げることが，そして，みずから持参することのできない捧げ物については，それを送り届けることが認められているのですから，そのように神々に対して許されていることをあなた方に対して行うことを恐れることなく，われわれの収穫の初穂を，あらゆる捧げ物のなかでも両陛下にもっとも相応しい捧げ物として，お送りすることにしました。

［164.11］というのも，哲学を真の意味で尊重し促進なさっている方々へ

する写本の読みに従う。

2 ルキウス・セプティミウス・セウェルス帝（後 145–211 年，帝位：後 193–211 年）とマルクス・アウレリウス・アントニヌス（カラカラ）帝（後 188–217 年，帝位：後 198–217 年）のこと。両皇帝に献呈されていることから，本作品は後 198–211 年の間に発表されたと考えられる。さらに，後 209–211 年に共同皇帝であったプブリウス・セプティミウス・ゲタ帝（後 189–211 年）の名が記されていないことを考慮すると，本作品の発表年代は後 209 年以前に絞られるかもしれない（Todd 1976: 1 n.3）（ただし，ゲタ帝は没後に記録抹消刑（damnatio memoriae）を受けたため，彼の名が後に削除された可能性も否定できないとする意見もある（Montanari 1980: 1438–1439））。セウェルス帝とカラカラ帝については，占星術をはじめとする種々の卜占術に熱心であったことが伝えられている（セウェルス帝：カッシウス・ディオ『ローマ史』77.11，ヘロディアヌス『マルクス帝没後のローマ史』2.9.3，『ローマ皇帝群像（ヒストリア・アウグスタ）』「セウェルス帝の生涯」3.9, 4.3，カラカラ帝：カッシウス・ディオ『ローマ史』79.2，ヘロディアヌス『マルクス帝没後のローマ史』4.12.3–4）。また，カラカラ帝は，彼が崇敬していたアレクサンドロス大王の死にアリストテレスが関与したとの理由からアリストテレス主義者を排斥した，とも言われている（カッシウス・ディオ『ローマ史』78.7）。これらの逸話の真偽は定かではないが，運命論との関係で期待される卜占術（特に占星術）への批判が本作品に欠けていることは，両皇帝に対する政治的配慮によるものかもしれない（Donini 1987: 87–89）（本作品と内容が重なるアプロディシアスのアレクサンドロス（？）『マンティッサ』25, 180.14–33 には，卜占術師への厳しい批判が見られる）。

3 底本とともに ἧς を削除（Bruns）。

4 底本とともに ἱεροῖς <τοῖς θεοῖς> θύειν と挿入（Bag. Cas. Grotius O Donini, sed post θύειν Cas. O）。

の捧げ物として，哲学的考察を企図している書物よりも相応しいものが何か他にありうるでしょうか。この書物に収められているのは，運命（εἱμαρμένη）とわれわれ次第のものごと（τὸ ἐφ᾽ ἡμῖν）についてのアリストテレスの見解です[5]。このアリストテレスの哲学に関して，私は両陛下の証のもと，公的に推挙された教師としてその学派を率いております[6]。この学説は，他の哲学的学説のいずれにも劣らない重要なものです。この学説がもたらす利益は，あらゆるところ，あらゆるものごとに及ぶのです（というのも，あらゆるものごとが必然的に（ἐξ ἀνάγκης）運命に即して（καθ᾽ εἱμαρμένην）生じると信じている人々[7]と，一部のものごとはそれを絶対的に生じさせる先行する原因（προκαταβεβλημέναι αἰτίαι）をもたずとも生じると考えている人々[8]とでは，

---

[5] 「運命」概念に関する議論は，アリストテレスの現存著作中にはほとんど見出されない。アプロディシアスのアレクサンドロス（？）『マンティッサ』25, 186.13–28 は，アリストテレスの「運命」概念を『気象論』352a29，『自然学』230a32 から読み取ろうと試みているが，それは後づけの解釈でしかない。なお，同『マンティッサ』25, 186.28–31 では，アリストテレス的な「運命」概念が説かれている著作として，他にテオフラストス『カリステネス』とポリュゼロス『運命について』が挙げられている。ただし，このうちテオフラストスの著作『カリステネス，あるいは，悲嘆について』は，友人カリステネスの死を悼んで書かれたと考えられるものであり，そこにストア派の「運命」概念につながるような自然学的観点からの議論が展開されていたとは考えにくい（Fortenbaugh 1984: 231–234）。ポリュゼロスはまったく不詳の人物。

[6] 2001 年にカラジャス（トルコ）で，アレクサンドロスが建立した彼の父の像の台座に当たる部分が発見された。そこに付された碑文の中で，アレクサンドロスは自身のことを「哲学者，アテナイの継承者（διάδοχοι）の一人」であると記している（Chaniotis 2004, Sharples 2005）。後 176 年にマルクス・アウレリウス帝によりプラトン派・ペリパトス派・ストア派・エピクロス派の四学派の教授職（おそらく「継承者」と呼ばれた）がアテナイに設けられたが（Todd 1976: 6 n.29），アレクサンドロスはその座を占めていたと推測される。

[7] 本作品で主要な批判対象とされている見解。基本的にストア派の学説だと考えられるが，名指しはされていないため，批判対象としてアレクサンドロスが自ら構築した説とみなす解釈もある。なお，「運命に即して（καθ᾽ εἱμαρμένην）」と「必然的に（ἐξ ἀνάγκης）」とを重ねる表現は，ストア派の中でもクリュシッポスの段階ではおそらく見られないものであり，後期ストア派（ピロパトル？）のものか（Bobzien 1998: 139 n.111, 371）。

[8] 本作品でアレクサンドロス自身がとる見解。

行為の面で異なってくるからです)。また，この学説において[9]真理を見出すのは，どちらの見解に対しても多くの明証的な事実（τὰ ἐναργῆ）が反証となるように思われるため，極めて困難なのです。しかし，学説のなかには，異なる主張に対して反論することによって，より明確に確立される場合もあるのですから[10]（私の考えでは，とりわけここでの主題はそれに当てはまります），以下ではアリストテレスの見解に沿って語った後に[11]，この問題に関してアリストテレスとは異なる主張をする人々に対して反論するつもりです。このように二つの主張を対置することで，真理が両陛下にとってより明白なものになることでしょう。

［165.5］われわれの議論の意図は，議論の演示（ἐπίδειξις）にあるのではなく，この主題に関してより厳密な吟味と教示を行うことにあります。両陛下もまたそのことに熱心でいらっしゃることは，あらゆる御業からお見受けすることができます。両陛下の御業には，真理ではなくその見かけを目指したものは，何一つ見出せないからです。もしお手隙の折にでもこの書物をお手に取った際に，もっと明確に論じる必要があると思われる点がありましたならば，その御質問についてお手紙を拝領するというさらなる名誉を私に授けて下さいますようお願いする次第です。というのも，主題そのものとその解明に用いられる論点を，一冊の書物ですべて明確なものにすることは，容易なことではないからです[12]。──

[9] 写本には αὐτῇ とあるが，底本とともに αὐτῷ と読む（Casp. O Donini; *ipso* lat.）。

[10] 底本とともに ἡ を挿入（Diels）。

[11] 底本とともに ἐν τοῖς μάλιστα καὶ αὐτὸ τοῦτ᾽ εἶναι νομίζω, κατὰ τὴν Ἀριστοτέλους δόξαν εἰπὼν ποιήσομαι と読む（Hackforth）。

[12] アリストテレス『形而上学』995a12–14。

【運命に関する様々な見解】

Ⅱ［165.14］運命というものがあること[13]，および，運命がそれに即して何かが生じることの原因であることは，人間がもつ先取観念（πρόληψις）[14]によって十分に確立されている。（というのも，人間の共通本性は真理を射当てることのできない空虚なものではなく[15]，人々はその共通本性に即して，ある事柄に関しては互いに同じ意見をもつようになるからである ── 自分自身が先行してとった見解のせいで，その見解との整合性を保とうとするあまり，異論を述べるよう強いられる者たちでもないかぎり[16]。この理由からして，クラゾメナイのアナクサゴラス[17]は，他の点では自然哲学者のなかでも無視できない人物であるものの，運命に関する人間の共通信念に反対している点では，信頼に値しない。この人は，運命に即して生じるものごとは何一つなく，この運命という語（ὄνομα）は空虚だと主張しているからである[18]。）

---

[13] 以下，アリストテレスによる「あるか（εἰ ἔστι）」と「何であるか（τί ἐστιν）」の区別に依拠している（『分析論後書』89b24-35，『自然学』202b35-36）。

[14] 元来エピクロス派によって導入された概念。経験的におのずと獲得される普遍的観念のことを意味し，すべての言語使用と概念的思考の基盤になるとされた（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』10.31, 33，エピクロス『ヘロドトス宛書簡』37-38）。この概念はストア派にも取り入れられたが，以下（172.17）で「共通で自然本性的な観念（ἔννοιαι）」と重ねられる点からも分かるように，アレクサンドロスの用語法はストア派を受け継ぐものと考えられる（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』7.54，偽プルタルコス『哲学者たちの自然学説誌』900b-c＝アエティオス『自然学説誌』4.11.3 Diels＝*SVF* II.83）。

[15] アリストテレス『弁論術』1355a15-17。

[16] アリストテレス『エウデモス倫理学』1217a10-14。

[17] ソクラテス以前の自然哲学者（おそらく前 500-428 年）。

[18] 59A66 DK。ただし，偽プルタルコス『哲学者たちの自然学説誌』885c＝アエティオス『自然学説誌』1.29.7 Diels＝59A66 DK には，逆にアナクサゴラスに「運命」概念を帰している記述が見られる。Mansfeld 1988.1; 191-194 は，アナクサゴラスには彼が導入したはずの「知性（νοῦς）」を活用した目的論的説明が欠けているという古来の指摘（プラトン『パイドン』97c-99b＝59A47 DK，アリストテレス『形而上学』985a18-21＝

［165.23］しかし，運命とはいったい何であるのか，そして，運命はいかなるものごとの内にあるのか，という点については，もはや人間共通の先取観念は十分に解明してくれないのである[19]。というのも，この運命については，万人が互いに同じ意見をもってはいないどころか，同じ人であっても常に同じ意見のままでいるとはかぎらないからである[20]。すなわち，機会やそのときどきの状況に応じて，人は運命についての見解を変えるものなのである。人々のなかには，あらゆるものごとが運命に即して生じると主張する者たちがいるが，彼らは運命を不可避にして逃れられない原因[21]とみなしている。他方で，生じるものごとがすべて運命に従って生じるわけではないと考え，生じるものごとの原因には運命以外のものもあるとみなす者たちもいる[22]。彼らは，運命そのものも確実性や不可避性をもつものとは考えず，本性的には運命に即して生じるものごとのなかにも，運命に即さずに，詩人の言葉を用いれば「定めに反して」[23]── すなわち運命に反して ── 生じるものごともあると考えるのである。またある人々は，あるときは ── とりわけ逆境に襲われたときには ── あらゆるものごとが運命に即して生じると考えるが，企てがうまくいっているときには，その成功の原因は彼ら自身であるとみなすのである。すなわち，そのことをしないこともできるという力能（ἐξουσία）を有しているという意味で，もし自分自身が他ならぬこの行為をしたのでな

59A58 DK）── しかもアレクサンドロスの解釈によると，アナクサゴラスは「作出的な原因をまったく用いていない」とすらされる（『アリストテレス「形而上学」註解』34.10–12）── から，このアナクサゴラス理解が導かれた可能性を示唆している。

19 底本とともに οὐ γὰρ μόνον οὐκ ἀλλήλοις ἅπαντες, ἀλλ᾽ οὐδὲ を削除（Freudenthal, Bruns）。

20 底本とともに αὐτῷ を削除（a^2 O）。

21 ストア派による「運命」の定義にしばしば見られる表現（偽プルタルコス『哲学者たちの自然学説誌』885b＝アエティオス『自然学説誌』1.28.4 Diels＝*SVF* II.917，ゲッリウス『アッティカの夜』7.2.3＝*SVF* II.1000，エウセビオス『福音の準備』15.15.6＝*SVF* II.528 他）。また，ストア派からの影響が見られる偽アリストテレス『宇宙について』401b12 にも，類似の表現が用いられている。

22 アレクサンドロス自身の見解。

23 ホメロス『オデュッセイア』14.509。

かったならばこのことも起こらなかっただろう，というように考えるのである。このような見解の相違[24]があるため，運命についての探究が ── 運命というものがあるかどうかについてではなく，運命とは何であるか，そして，生じ存在するいかなるものごとの内にそのような自然本性［運命］はあるのか，という点についての探究が ── 哲学者にとっては必要になるのである。

【運命に関するアレクサンドロス自身の見解】

Ⅲ［166.15］周知のように，運命について何がしかのことを論じている者は皆，運命とは生じるものごとにとっての何らかの原因であると論じている[25]。すなわち，運命とは生じるものごとが実際に生じるその仕方で生じることの原因である，と説明され語られているからである。しかし，「原因」という語は多くの仕方で語られる［多くの意味をもつ］のであるから[26]，問題を秩序立てて追究するためには，運命はいかなる種類の原因に属していると考えるべきかを，まず把握しなければならない。なぜなら，多くの仕方で語られるいかなる語も，適切に区別することなく語られるならば，理解できないからである。

［166.22］アリストテレスが示したように[27]，生じるものごとの原因は，四種類の原因に区別される[28]。すなわち原因のうち，あるものは作出的なもの

---

[24] Mansfeld 1988.1 は，ここにはピュロン主義が懐疑論を導くために用いた議論方式からの影響が見られると指摘している。ただし，先行見解の相違の確認から出発する方法論は，すでにアリストテレスにも見られる（『トポス論』104b1-5，『ニコマコス倫理学』1095a20-28, 1145b8-20 他）。

[25] 底本とともに ὤν を削除（V^2）。

[26] アリストテレス『形而上学』1013b3-5。

[27] 底本とともに αἰτίας を削除（$V^2 a^1$）。Thillet は ὁ θεῖος (Euseb.)「神のごとき［アリストテレス］」と読むが，こうした新プラトン主義的表現はアレクサンドロスの現存著作中には見出されない。

[28] アリストテレス『自然学』194b16-195a26, 198a14-198b9，『形而上学』983a24-b6, 1013a24-b28 他。

であり，またあるものは質料の役割を果たしており，さらには形相の意味での原因もある。そして以上の三つの原因以外に，生じるものごとがそのために生じるところの目的もまた原因となっている。以上が，諸原因の区別のすべてである。何かの原因であるものは何であれ，以上の原因のいずれかに属することが見出されるだろうからである。実際，生じるものごとのすべてが以上の全種類の原因を必要とはしないにせよ[29]，最も多くの原因を必要とするものごとであっても上述の数を超えることはない。

［166.29］原因の種類の区別は，生じるものごとのなかから一例を取り上げて見てみると，より明らかになるだろう。ここでは彫像の例によって，原因の種類の区別を示してみることにしよう[30]。彫像の場合[31]，作出的な原因としては，彫像を作った技術者 ──「彫像家」と呼ばれる ── がその原因となっており，質料としては，基体となる銅や石など，技術者により技術に即して形作られるものがその原因となっている。この基体もまた，彫像が生じたこと，および，彫像が存在することの原因だからである。また，技術者によってこの基体の内に生じる形相もまた，それ自体が彫像の原因であり，この形相のゆえに，彫像は円盤を投げる人や槍を投げる人など何か一定の形をもつものとなっているからである。しかし，彫像の生成の原因は，以上に尽きるわけではない。なぜなら，その生成のいかなる原因にも劣らぬものとして，そのために彫像が生じたところの目的 ── 例えば，誰かを顕彰することや，神々に対する信心など──があるからである。実際，このような原因がなければ，そもそも彫像は生じなかっただろう。以上のように，原因にはこれだ

---

29 アリストテレス『形而上学』1044b3-20 他。

30 彫像の例はアリストテレスもしばしば用いているが（『分析論後書』95a3-5，『自然学』194b23-26, 195a3-8, 195a32-b3，『動物の発生について』724a23-26，『形而上学』1013a24-26, 1013b6-9, 1013b34-1014a3, 1014a10-15），この例に基づいて四原因すべてを説明した箇所はアリストテレス自身の現存著作には見られない。ただし，アリストテレスの四原因論を説明するために彫像の例が用いられている資料として，セネカ『倫理書簡集』65.4-6 がある（アレクサンドレイアのクレメンス『ストロマテイス』8.9.26.2-3 も参照）。

31 底本とともに δὲ と読む（Euseb.(I) Cas.）。

けの種類があり，それぞれ相互に明らかな区別があるのだが，運命は，それに即して生じるものごとに対して彫像を制作する技術者と類比の関係にあるため，作出的な[32]原因に数え入れるのが正当であろう。

Ⅳ［167.16］このような事情であるから，次に作出的な原因について論じなければならない。そうすることで，生じるものごとすべての原因を運命に帰さなければならないのか，それとも，何らかのものごとの作出的な原因として，この運命以外のものがあることを認めるべきなのかが，明らかになるだろうからである。アリストテレスは，生じるものごとのすべてを区分して，それらには，何かのために生じるものごと ── なぜなら，その生じるものごとの何らかの設定された（προκείμενον）目標や目的を，その作出者がもっているから ── と，いかなるものごとのために生じるのでもないものごととがある，と論じている[33]。というのも，作出者により何らかの設定（πρόθεσις）に即して生じるのではなく，限定された目的に向けられてもいないようなものごと（例えば，楊枝をつまんだり回したりすることや，髪を触ったり引っ張ったりすることなど)── こうしたものごともまた生じるということは明らかであるが[34]，それらは目的という意味での原因，すなわち，「何かのために」[35]という意味での原因をもってはいないからである。

［168.1］このように生じるものごとは，目標なしに端的に生じるのであり，これらには理に適った区分は何もない。これに対して，何かに向けられており何かのために生じるものごとは，自然本性に即して生じるものごとと，理性に即して生じるものごとに区分される[36]。実際，自然本性を生成・生起

---

[32] 底本とともに ποιητικοῖς と読む（V^1γρ. a^{12}）。あるいは τοιούτοις（「そのような」）のまま読むべきか（V^1 lat.）。

[33] アリストテレス『自然学』196b17-18。

[34] 底本とともに ἄ を削除（Euseb. a^2）。

[35] 底本は τίνος（「『何のために』という意味での原因」）と読むが（V a^1），τινὸς とする（a^2 O Long）。

[36] アリストテレス『自然学』196b21-22，『形而上学』1032a20，『ニコマコス倫理学』1112a31-33。なお，アリストテレスの λόγος に「理性」という訳語を当てるのは（正当

(γένεσις)[37] の原因とするものごとは，ある目的へと何らかの数と限定された秩序に即して[38] 進み，その目的に達すると生じるのを止めるのである ── 何かがそれらの邪魔となり，その設定された目的へと向かう自然本性に即した過程を妨げない限り[39]。

［168.7］他方，理性に即して生じるものごともまた，何がしかの目的をもっている。なぜなら，理性に即して生じるものごとの内には，でたらめに生じるようなものごとは何もなく，それらはすべて何らかの目標に向けられているからである。理性に即して生じるものごととは，その作出者がそれについて思考し，それが生じるような仕方で構成することによって生じるものごとのことである。技術に即して生じるものごとも選択に即して生じるものごとも[40]，すべてこのような仕方で生じるのだが，これらは自然本性によって生じるものごとと次の点で異なっている。すなわち，自然本性によって生じるものごとは，そのような生成・生起の始源と原因を自分自身の内に有しているのであり（というのも自然本性とはこのようなものだから），また，ある種の秩序に即して生じるのではあっても，だからといってそれを作出する自然本性が，技術の場合と同じような仕方で，それについて思考しているわけではない[41]。これに対して，技術と選択に即して生じるものごとは，運動の始

にも）回避されることが多いが，本作品においては λόγος が概して各人がもつ心的能力として捉えられていることに鑑み，一貫して「理性」と訳す。

[37] 以下 γένεσις という語はものの「生成」とことの「生起」の両方にまたがる意味で用いられており，そのことが議論の理解に不可欠であるため，文脈から一方の意味に絞れる場合をのぞき「生成・生起」と訳す。

[38] Sharples は（おそらく hendiadys とみなし）'according to a certain definite and numbered order'と訳している。

[39] アリストテレス『自然学』199a8–20, 199b13–18,『動物の諸部分について』641b23–26。

[40] 底本とともに καὶ <τὰ> κατὰ と挿入（Euseb. (om. ND), lat. (cod. O), Donini）。

[41] 文法上は破格になると思われるが，内容に基づきこのように区切って読む（底本は「というのも自然本性とは」以降をすべて括弧の中に入れている）。おおむね Thillet の区切り方，Natali の注に従っているが，Zago 2012: 369–374 もこれとほぼ同じ方針でテクスト自体の修正を提案している。すなわち，自然本性によって生じることと理性に即して生じることの対比が，(1)作出的な原因が自分自身の内にあるか外にあるか，(2)作出

源とそれを作出する原因を，自分自身の内ではなく外に有しているのであり[42]，また，それらが生じることの原因[43]となっているのは，作出者によるそれについての思考なのである。

［168.18］第三に[44]，何かのために生じるものごとの中には，偶運的（ἀπὸ τύχης）ないし偶発的（(ἀπὸ) ταὐτομάτου）に生じると信じられているものごともある。これは，主導的に（προηγουμένως）[45]何かのために生じるものごととは，次の点で異なる。すなわち，主導的に何かのために生じるものごとの場合，目的に先立って生じるものごとはすべてその目的のために生じるが，これに対して，偶運的ないし偶発的に生じると信じられているものごとの場合，目的に先立って生じるものごとは，［実のところ］他のもののために生じるのであるが，他のものごとのために生じているそのことに，偶発的ないし偶運的に生じると言われることが，その目的であるかのように到来するのである[46]。

Ⅴ［168.24］このようにして，生じるものごとはすべて上述の種類へと振り分けられるのであるから，これに続いて，運命をいかなる種類の作出的な原因の内に位置づけるべきなのかを考察しなければならない。では，はたして運命を，いかなるものごとのために生じるのでもないものごとの内に位置づけるべきだろうか。いや，これはまったくもって不合理である。なぜなら，何かが運命に即して生じたと言うとき，われわれは「運命」という語を，常に何らかの目的に関連づけて用いているからである[47]。それゆえ運命は，何

者の思考によるかよらないか，の二点によってなされていると解する。なお，(1)についてはアリストテレス『自然学』192b13–34，『形而上学』1049a5–18，(2)についてはアリストテレス『自然学』199a20–23, 199b26–28 を参照。

[42] 底本とともに ποιοῦσαν ἀλλ᾽ οὐκ ἐν αὐτοῖς, καὶ と読む（V. lat. Donini）。

[43] 底本とともに <αἴτιον ὁ> τοῦ ποιοῦντος と挿入（Donini）。

[44] 写本には ἔστιν ἐν とあるが（V a^1 Bag.^{2}），底本とともに τρίτον δέ ἐστιν ἐν と読む（Euseb. Bag.^{1}）。

[45] 「主導的」と訳した προηγούμενος および προηγουμένως という語は，「先行的」などの意味にもなるが，本作品では主として「付帯的，二次的」と対比される意味で用いられていると考えられる。

[46] 以下Ⅷ章を参照。

[47] 「運命」という語の一般的な用法が目的指向性を含意しているかどうかは疑わしい。あ

らかのものごとのために生じるものごとの内に位置づけられなければならない。そして，何らかのものごとのために生じるものごとには，理性に即して生じるものごとと，自然本性に即して生じるものごととがある以上，運命はその両方の内にあると考えるか ── その場合，生じるものごとはすべて運命に即して生じる，と論じることになる[48] ──，もしくは，そのどちらか一方の内にあると考えるか，このいずれかの立場を採らなければならない。

［169.6］しかし，理性に即して生じるものごとが理性に即して生じるとされるのは，それを作出する者が作出しないこともできる力能をもっているという点によると思われる[49]。実際，技術者によって技術に即して生じるものごとは，必然的に彼らによって生じるわけではないと思われる（技術者はそうしたものごとの各々を，作らない力能も［作る力能と］同等にもつ者として，作るのである。またさらに，家や寝椅子が運命に即して生じたと言ったり，リュラが運命に即して調弦されたと言ったりするのは，どうしても不合理ではないだろうか）。それだけではなく，選択が左右するものごと（すなわち，徳や悪徳に即して行為されること）も，［必然的に生じるわけではないと思われる］[50]。そして，この選択が左右するものごとは，われわれ次第のものごとであると思われる。われわれ次第のものごととは，それが行為されることも行為されないこともわれわれが左右していると思われるものごとであって，これらのものごとの原因が運命であると論じることも，そうしたものご

るいはストア派の「運命」概念を暗に念頭に置いたものか。

[48] 「いかなるものごとのために生じるのでもないものごと」や「偶運的ないし偶発的に生じるものごと」が考慮されていない点で，いささか奇妙な論理である。

[49] アリストテレス『形而上学』1046b4–5, 1048a8–10。

[50] 底本とは異なり，ἀλλὰ μὴν καὶ ὧν προαίρεσις κυρία (ταῦτα δ’ ἐστὶν ὅσα κατ’ ἀρετήν τε καὶ κακίαν πράττεται). καὶ ταῦτα ἐφ’ ἡμῖν εἶναι δοκεῖ. と区切って読む。底本は，πράττεται の後にピリオドを打たず，「それだけではなく，選択が左右するものごと（すなわち，徳や悪徳に即して行為されること）も，われわれ次第のものごとであると思われる」と読んでいる。しかし，ここではまず，「技術に即して生じるものごと」（制作物）とともに「選択が左右するものごと」（行為）もまた「必然的に生じるわけではない」ことが確認された後，特に後者についてそれが「われわれ次第のこと」であるという論点が付加されている，と解する方がよいだろう。

とのいずれかを絶対的に生じさせたり生じさせなかったりするような何がしかの先行する外的な始源ないし原因が存在すると論じることもできないのであれば（仮にそのような仕方で生じるならば，こうしたものごとの内の何ものも，もはやわれわれ次第ではありえないだろうから），Ⅵ［169.18］残るは，運命は自然本性的に生じるものごとの内にあると論じることであって，したがって，運命と自然本性は同じであるということが帰結するのである[51]。

［169.20］というのも，運命づけられたものごとは自然本性に即しており，自然本性に即したものごとは運命づけられているからである。実際，人間が人間から生じたり[52]馬が馬から生じたりすることが，自然本性には即しているが運命には即していない，ということはなく[53]，むしろ，これらの原因［運命と自然本性］は，語だけが異なっているかのように，互いに歩を同じくしている。それゆえ，各々のものにとっての自然本性に即した生成・生起の第一の諸原因（すなわち，神的なものども［天体］[54]と，それらの規則正しい円運動）が，運命の原因でもあると論じられるのである。というのも，神的なものども［天体］が運動する際にこの［地上の世界の］ものごとに対して示す配置のあり方が，あらゆる生成・生起の始源だからである[55]。

［169.26］運命は，これらのものごと［自然本性に即して生じるものごと］

---

[51] ストア派においても「運命」が「自然本性」と同一視されているが（ストバイオス『抜粋集』1.78.18–20＝*SVF* I.176, ストバイオス『抜粋集』1.79.8–12＝*SVF* II.913 他），それは世界全体を統御する「共通の自然本性」のことであり，しかもその統御が妨げられることは決してないとされる（プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1050c–d＝*SVF* II.937 他）。これに対して，アレクサンドロスが論じるのは「各々のものの自然本性」であり，またそれに反したものごとの生じる余地もあるとされている点で，その内実はストア派とは大きく異なる。

[52] アリストテレス自身がしばしば用いる例（『自然学』194b13,『形而上学』1032a25, 1070b33–34 他）。

[53] Mansfeld 1988.2: 417 は ἐστιν を ἔστιν と読み，「ということはありえず」と解している。

[54] 底本とともに αἴτια (ἔστιν δὲ ταῦτα <τὰ>と読む（Bruns）。

[55] アリストテレス『自然学』194b13,『生成と消滅について』336a31–337a15, 338a18–338b19,『形而上学』1071a11–17。なお，この箇所に占星術的な背景があるかどうかをめぐって，解釈が分かれている。

の内に存し，また上述のようなものである以上，運命に即して生じるものごとのあり方は，自然本性に即して生じるものごとのあり方と同様でなければならない。しかしながら，自然本性に即して生じるものごとは必然的に生じるわけではなく，このような仕方で［自然本性に即して］生じるものごとの生成・生起は，ときに妨げられることもある。それゆえ[56]，自然本性に即して生じるものごとは，たいていの場合に生じるのではあっても，必然的に生じるわけではない[57]。なぜなら，自然本性に反するものごとも，それらのものごとの内に余地を有しているのであって，自然本性が何らかの外的な原因によって自らの活動を妨げられる場合には，実際に自然本性に反するものごとが生じるからである。それゆえ，人間が人間から生じるのは，必然的ではなくたいていの場合であり，また，自然本性に即して生じるものごとにとって予め定められたと考えられる時期にしたがって，そのように生じるものごとの各々が常に生じるわけではないのである[58]。

［170.5］自然本性に即して生じるものごとの内には自然本性に反するものごと[59]も存する（技術に即して生起するものごとの内にこうした事情があるのと同様に）以上，運命に即して生じるものごとの内にもまた運命に反したものごとの余地があることになるだろう。したがって，自然本性に反したものごとの生じる余地があり，それが空虚な語ではないのならば，生じるものごとの内には運命に反したものごとの余地もあることになるだろう。それゆえ，各々のものの固有の自然本性[60]が，その内で自然本性に即して生じるものごとの秩序の，始源であり原因である，と言えば理に適っていることにな

---

[56] 写本には ἐμποδιζομένη διὸ ποτέ μὲν ὡς ἐπὶ とあるが，底本とともに ἐμποδιζομένη ποτέ. διὸ [μὲν] ὡς ἐπὶ と読む（Diels）。

[57] 底本とともに ἔχει を削除（V^2）。

[58] 底本とともに ἀνθρώπου の後にコンマを置き（Sharples），ὥστεをοὔτε と読む（Apelt, Rodier）。

[59] 底本とともに<τοῦ> παρὰ φύσιν と挿入（Lond. O）。

[60] ここまで論じられてきたのは種にとっての「自然本性」のことであったと思われるが，ここでいくらか唐突に「各々のものの固有の自然本性」に議論が移っているか。

るだろう。この各々の固有の自然本性から，人間の生や死はたいていの場合秩序を得ているからである。

［170.12］実際，われわれが目にするように，身体もまた，自然本性において何らかの性質のものであることにより，病気においても死においてもその自然本性的な組成に従うが，必然的にそうなるわけではない。なぜなら，治療，気候の変化[61]，医師の指示，神々の助言が，そのような秩序を十分破りうるからである。同じように魂についても，自然本性的な構造（κατασκευή）に対応して[62]，それぞれの人の選択や行為や生が異なっているのが見出されるだろう。ヘラクレイトス[63]によれば，「人間の性格」── すなわち自然本性──「こそ［その人の］ダイモーン（神霊・運命）」[64]だからである。

［170.19］実際目にすることができるように，人の行為や生や死は，たいていの場合自然本性的な組成や性向に従っている[65]。自然本性的に危険を冒すのが好きで大胆な者にとっては，たいていの場合その死も何がしか暴力的なものであり（というのは，それがその自然本性の運命だから），また，自然本性において放埒な者にとっては，そのような［放埒な］快楽にまみれて抑制のない者らしい生を送ることが ── よりすぐれた要素が彼の内に生じて，自

---

61 あるいは転地療法のようなものが念頭に置かれているか（Zierl はそのように訳している）。

62 直後の議論とのつながりを考えて，παρὰ を「に対応して」と解する（Thillet, Natali）。ただし，エウセビオスは，この箇所に「修練によって，学習によって，より優れた議論によってより善い者となることで（ἐξ ἀσκήσεως καὶ ὑπὸ μαθημάτων καὶ ἀπὸ λόγων κρειττόνων βελτιουμένων）」と付加していることから，παρὰ を「に反して」と解していたと考えられる（Sharples, Zierl はそのように訳している）。

63 イオニア地方エペソス出身の哲学者（前 500 年頃）。

64 22B119 DK。Natali の訳に従い「すなわち自然本性」と言い換えられているのは「性格」と解したが，「ダイモーン」ともとりうる（アプロディシアスのアレクサンドロス（？）『マンティッサ』25, 185.23–24 は後者か）。その場合には「人間の性格こそ［その人の］ダイモーン（神霊・運命）── すなわち自然本性 ── 」となる。

65 写本には ἀκολούθως とあるが，底本とともに ἀκολουθεῖν と読む（Donini）。アリストテレスは，「本来（κυρία）の徳」と対比される「自然本性的（φυσική）な徳」について，『ニコマコス倫理学』1144b1–17 で論じている。また『政治学』1332b6–8 も参照。

然本性に即した生を押し退けない限り ── [運命に即しており]，頑固な者にとっては[66]，苦痛に耐え忍びそのような中で生を全うすることが，運命に即しているのである。さらに，自然本性においてさもしく財産の獲得に飽き足らない者にとっては，運命的なものごともまたそれに相応じたものとなる。なぜなら，たいていの場合，そのような者の生は不正にまみれ，そのような仕方で[67] 行為する者の生の末路は，こうしたものごとに従ったものとなるからである。それでもなお[68]，そのような人々が [自らの] 生に従いかつ[69] 運命に即しているような状況にある場合には，彼らが目下被っている災悪の原因は彼ら自身であるとみなされて，非難されるのが常なのである[70]。

[171.7] さらに，卜占を行うと公言している人々を擁護したい人がいれば，彼らが絶対的に当たるわけではないことの原因として，この点をもち出すことができるだろう。すなわち，各々のものの自然本性つまり運命があらゆるものごとを成就させるのではなく，運命に反して生じるものごともあるのであり，そして占師は [あくまで] 運命に即して生じるものごとの告げ手なのである，という点である[71]。同じ事情は，観相術師にも当てはまる。実際，観相術師ゾピュロス[72] が哲学者ソクラテスについて，彼の実際の生き方の選択

---

[66] 底本とともに γενόμενον ἐκσείσῃ τοῦ κατὰ φύσιν <βίου, τῷ δὲ καρτερικῷ> αἱ τῶν と読む（Donini）。アプロディシアスのアレクサンドロス（？）『マンティッサ』25,185.29 に基づく類似の挿入案は，Grotius 以来いくつも提示されている。なお，挿入箇所に含まれる καρτερικός という語は，「辛抱強い」というよい性格を表すことも多いが，ここでは前後の文脈から判断して，どちらかというと悪い意味で用いられていると考えられるため（Mansfeld 1988.2: 417），「頑固な」と訳した。アリストテレス『ニコマコス倫理学』1150a32–1150b1 を参照。

[67] 写本には κατ᾽ αὐτὰ とあるが，底本とともに κατὰ ταῦτα と読む（Bruns in app., lat.）。

[68] Mansfeld 1988.2: 417 に従い，καὶ を adversative ととる。

[69] 底本とともに καὶ を挿入（V^2 a^{12} O）。

[70] 各人の性格は運命づけられているとしても，個々の行為までは運命づけられていないとする類似の議論が，キケロ『運命について』7–11 に見られる。

[71] 卜占術を擁護するのはストア派の立場であるが，ストア派自身は，占いが外れる理由を占師の技量不足に求めている（キケロ『卜占について』1.118＝*SVF* II.1210）。

[72] ここで挙げられている観相術師ゾピュロスの逸話は，キケロによっても引かれている

から大きく外れたおかしなことを述べて，そのせいでソクラテスの弟子たちから笑い者にされたとき，ソクラテスは，ゾピュロスは決して間違ってはいない，と言ったのである。もし哲学の訓練によって自然本性よりも善くならなかったならば，自然本性による限りではそのような者となっただろうからである。

［171.16］以上が，ペリパトス派による，運命についての学説の要点である。

【運命論に対する批判Ⅰ：偶運と偶発，許容と可能】

Ⅶ［171.18］先に示された［われわれの］立場の証明に，あらゆるものごとが運命に即して生じると主張する人々に随伴する不合理を対置するならば，上述のことはより明白な仕方で確立されるだろう。というのも，こうして議論を結び合わせることによって，われわれは，複数の学説の対置を通して真理をいっそう分かりやすいものにするだろうし，それに加えて，同じことに何度も言及する必要から逃れられるだろうからである[73]。

［171.22］実際，自分は哲学しており存在するものどもにおける真理を追究していると主張し[74]，さらに自分はその真理の点で他の人たちよりも優っているとみなし[75]，それゆえ他の人々にもそのことを勧める者が，あらゆるものごとが必然的に運命に即して生じると論じる学説に自らを委ねてしまっ

（『運命について』10，『トゥスクルム荘対談集』4.80 他）。この逸話の由来は，エリスのパイドン（プラトン『パイドン』の語り手とされる人物）が執筆した対話篇『ゾピュロス』（散逸）にあると推測されている（『ゾピュロス』の資料は Rossetti 1980 にまとめられている）。キケロによると，ゾピュロスはソクラテスの性格・自然本性を愚鈍であり好色であると判定し，アルキビアデスに嘲笑されたと伝えられている。ただしこの逸話は，当初は哲学の勧めに主眼をおいたものであったと考えられ（納富 2005: 26 も参照），運命論との関係で用いられるようになるのはヘレニズム期以降，おそらくカルネアデスに由来するか。

[73] 底本とともに写本通り τε を読む。

[74] 写本には λέγονται とあるが，底本とともに λέγοντες と読む（Schwartz）。

[75] 底本とともに τοὺς φιλοσοφοῦντας を削除（Bruns）。

たのはどうしてなのか，と疑念を抱かれても当然のことだろう。われわれが見るところでは，素人の中でこのような学説に逃げ込むのは，自分には何ら長所がないことを自覚し，自分を取り巻く悪しき状況の原因を自分から運命へと移し替えるような類の人々だけである。この学説は，明証的な事実と噛み合っておらず，事実そうだということの信頼できる証明ももたない。さらにこの学説は，われわれ次第のことが存在することを否定するのであるが，このようなこと［われわれ次第のことが存在しないということ］を信じてしまうならば，それよりも大きな損失が何か他に議論から生じることなどありうるだろうか。

［172.4］さて，この学説が明証的な事実に反することは，次のことから明らかである。すなわち，素人であれ哲学者であれ，ほとんどすべての人が，偶発的（αὐτομάτως）ないし偶運的に生じるものごとがあるということや，生じるものごとの内には許容的に（ἐνδεχομένως）[76] 生じるものごともあるということ，および，存在するものごとの内には「これよりこれというわけではないものごと（τὸ μηδὲν μᾶλλον τόδε τοῦδε）」の余地もあるということ[77] を信じているが，それにもかかわらず，これらのいずれもが，あらゆるものごとが必然的に生じると主張する人々にしたがうと，確保されなくなってしまうということである ── 少なくとも一般に認められているこれらの語の意味を動かすことなく，これらを確保するならばの話であるが。というのは，語の意味を何か異なるものに置き換えたうえで，その語が保持されているのだから先に言われたもの［その語が元々意味していたもの］も保持されていると考えることは，元々の立場を確保することにはならないからである。すなわち，偶運的に生じるものごとがあるということが確保されるのは，そのように［偶運的に］生じるものごとの本性を否定し必然的に生じるものごとに偶運という語を与えた場合ではなく[78]，偶運という語がそれについて述定され

[76] ἐνδεχομένως, ἐνδέχεσθαι は「ありうる仕方で」「ありうる」などとも訳しうるが，以下では明確を期し「許容的に」「許容される」と訳した。

[77] アリストテレス『命題論』19a18-20。

[78] 底本とともに<ἂν> ἀνελών と挿入（V^2 lat. a^1 O）。

ると一般に認められているものごとを確保できると示した場合なのである[79]。

Ⅷ[172.17] 共通で自然本性的な観念[80]を保持するすべての人間によって語られるところでは，偶運的ないし偶発的に生じるものごととは，主導的には[81]何か他のものごとを作出する原因に，付随するものごとのことである[82]。なぜなら，何か他のものごとのために生じる何らかのものごとに，それがそのために生じたところのものごとではなく，当初は期待してもいなかった他のものごとが到来した場合，そのものごとは偶運的に生じたと言われ，またそのものごとは，自体的には原因なしに生じたが，付帯的には何か他のものごとの生成・生起のために生じたところのものごとを原因とする，と言われるからである。そして，あらゆる人が偶運的に生じるものごとを以上のようなものとして語っていることは，彼らが偶運的に生じると語るときにそのものごとに割り当てている意味から明らかである。

[172.25] すなわち，ある人が宝を偶運的に見つけたと言われるのは，その人が宝を見つけるためではなく何か他のものごとのために掘っていたのに，宝に遭遇した場合[83]である（というのも，そのために掘っていた場合には，偶運的に見つけたことにはならない。なぜなら，そのために掘っていたところのものごとが彼に到来しただけだからである。しかし，宝の発見についてまったく気にかけずにいる人が，何か他のものごとのために行為していた際に，その目的であるかのように宝の発見が到来した場合には，その人は偶運的に宝を見つけたのだ，とあらゆる人が語るのである）[84]。また，ある人が偶

---

79 底本とともに ἂν αὐτὰ δείξῃ と読む（Rodier）。

80 注 14 を参照。

81 底本とともに προηγουμένως と読む（V^1 lat. a^2）。

82 以下の議論は，主にアリストテレス『自然学』第 2 巻 5-6 章，『形而上学』Δ巻 30 章に依拠している。ただし，アリストテレス自身の議論は，当然ながら運命論との対比を意識したものではなく，したがってアレクサンドロスが主張するように本当に運命論と齟齬を来すものなのかどうかは議論の余地があろう。

83 底本とともに ὅταν と読む（Euseb.）。

84 アリストテレス『形而上学』1025a15-19，『ニコマコス倫理学』1112a27。

運的に金を回収したと言われるのは，その人が何か他のものごとのためにアゴラ［広場・市場］へとやって来たのに，金を持っている債務者に遭遇し借金を返してもらった場合である。というのは，アゴラへとやって来たことには[85]何か他の主導的な目的があったのに，借金を返してもらうということがその人に到来したのだが，それは付帯的にその目的であるかのように生じたことだったからである[86]。実際，もしその人がアゴラにやって来たのがそのため［借金を返してもらうため］であったならば，そのやって来たことには設定された目的があったことになるのだから,「偶運的に借金を返してもらった」と言われることはもはやないだろう[87]。また，誰かの馬が偶発的に確保されたと言われるのは，食物を望んでかあるいは他の目的のために馬泥棒の手から逃れたが，逃げて走っていたところ主人に遭遇するということが到来したという場合である[88]。しかし，あなた方のためにこれ以上の例を挙げて，前述の点を詳しく論じる必要があるだろうか。ここでの目的のためには，上述の語［偶運・偶発］がいかなる意味のものについて述定されるのかを示すだけで，十分だからである。

［173.13］偶運的ないし偶発的に生じるものごととは，主導的な原因に即して生じるのではないものごとのことであるから（というのも偶発や偶運とは，それに先んじて生じたものごとに到来することがめったにないものごとに属するから），「生じるものごとの各々は，それが存在したり生じたりするならば必然的にこのものごとが存在したり生じたりするところの，何らかの先行原因を有しているのだから，あらゆるものごとは何らかの先行する主導的[89]な原因によって必然的に，存在するものごとは存在し，生じるものごとは生じる」と主張する人々にしたがう場合，前述のもの［偶運・偶発］の内のいずれかを確保するなどいかにしてできるだろうか［いやできない］[90]。

---

[85] 底本とともに τοῦ を挿入（Bruns）。

[86] 底本とともに τὸ μὲν ποιητικὸν αἴτιον τὸ δὲ τούτου τέλος を削除（Bruns）。

[87] アリストテレス『自然学』196a3-5, 196b33-197a5, 15-18。

[88] アリストテレス『自然学』197b15-16。

[89] ここでの「主導的（προηγούμενα）」は，ストア的な用語法によるものか。

[90] 底本とともに γένεσθαι; τὸ <δὲ> μηδὲν と読む（von Arnim）。

［173.20］前述のことは何も確保しないにもかかわらず，何か他のものごとに偶運という語を割り当てた上で[91]，あらゆるものごとが必然的に生じるとみなしてもそれ［偶運という語が新たに割り当てられたものごと］は否定されないからといって，偶運もまた否定されないと論じることは，自分自身と自分の話を聞く者とを同様に詭弁で騙すような行いに他ならない。実際，このような論じ方では，運命と偶運は同じものであると言うことができるし，さらには偶運を否定するどころか，あらゆるものごとが偶運的に[92]生じると言うことすらできてしまうだろう。しかし，彼らが責められていたのは，偶運という語を確保するかどうかという点ではなく，それについて偶運的ないし偶発的に[93]生じると述定されるものごとが実際にそのように生じることを否定するかどうかという点についてだったのである。

［174.1］偶運や偶発を「人間の思考（λογισμός）には不明な原因」と定義する者[94]がしていることは，偶運の自分勝手な意味を導入して割り当てることに他ならない[95]。実際，病気の原因が不明である場合に「偶発的に病気になった」と言うことがあるからといって，その点をこのこと［偶運や偶発を「人間の思考には不明な原因」と定義すること］を確立するために持ち出すのは誤りである。なぜなら，人々がそう語るのは，何らかの原因が存在するのにその原因が彼らには不明であるとみなしてのことではなく，原因なしに生じたと自ら信じるものごとについて，人々は偶発［という語］を述定するのだ

---

[91] 底本とともに ὄνομα, τῷ μὴ と読む（V^1 von Arnim）。

[92] 底本とともに οὐκ を削除（V^2 a^{12} O）

[93] 写本には τὸ αὐτόματον とあるが，底本とともに τὸ αὐτομάτως と読む（Donini ex lat.）。

[94] ストア派が採用したと伝えられる定義である（シンプリキオス『自然学註解』333.5–17＝*SVF* II.965，偽プルタルコス『自然学説誌』885c＝アエティオス『自然学説誌』1.29.7 Diels＝*SVF* II.966，テオドレトス『ギリシア人の病の癒し』6.15, p. 278 Canivet＝*SVF* II.971，プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1045c＝*SVF* II.973）。ただし，これに類似した定義はアリストテレス『自然学』196b5–7 において既に報告されている（なお，シンプリキオス『アリストテレス「自然学」註解』333.1–17 は，この定義がさらに時代を遡るものであるとして，他のいくつかの資料を引いている）。

[95] 底本とともに ἢ を挿入（V^2 lat. a^2 Lond. O.）。

からである。ともかく誰も，その原因が存在するとみなして探求しているものごとについては，それが偶発的に生じたとは言わないし，偶発的に生じたと信じているものごとについては，その原因を探求することもない。それゆえ医師であればもはや，それら［病気］の原因をいまだ知らない場合でも，そのように［偶発的に病気になったと］語ることはしないのである。結局，このような［運命論者による］偶運の説明がより適切に当てはまるのは，前述したような万人によって[96]偶運的に生じると言われるものごとについてではなく，偶運的に生じるとはこれまで誰一人言ってこなかったようなものごとについてなのである。

［174.14］宝を見つけたことや借金を返してもらったことの原因は，人間の思考に不明ではなく，むしろ明白であり明瞭である。すなわち，宝を見つけたことの原因は掘ったことであり，借金を返してもらったことの原因はアゴラにやって来たことである。宝を見つけた人は，もし掘らなければ見つけなかっただろうし，借金を返してもらった人は，もしやって来なければ借金を返してもらわなかっただろうからである。しかし，いま述べた［掘ったことやアゴラにやって来たことといった］原因は[97]，それらのものごとの主導的な原因ではなく，他のものごとのために生じたのであったがゆえに，それらのものごと［宝を見つけたことや借金を返してもらったこと］は偶運的に生じたこととして把握されたのである。人間の思考に不明である原因を有するのは，むしろ，それが生じる原因は知られていないものの，ある種の反作用によって生じると信じられているようなものごとである。例えばお守りには，実際にそのように作用することについて理に適った説得的な原因が何もないにもかかわらず使われているものがあるし，さらに呪文やこうした類のまじないもそうである。これらのものの原因が不明であることには万人が同意し，またそれゆえに，これらには原因を帰すことができない（ἀναιτιολόγητος）と言われている。しかし，これらのものが作用するのは何か一定の原因に

[96] 写本には ἐπὶ πάντωνとあるが，底本とともにὑπὸ πάντων と読む（Sharples）。

[97] 底本とともに <τὰ> προειρημένα と挿入（a^2）。

よってであると信じられているため，これらのものの中には偶運的に作用しているものがあると言う人は誰もいないのである。なぜなら，偶運的なものごとがそのように生じると言われるのは，原因が不明であるためではなく，主導的で第一義的（κυρίως）な原因を欠くためだからである。

Ⅸ［174.29］偶運についての彼ら［運命論者］の議論は以上のようなものであるが，この議論が一般に認められていること（τὰ κείμενα）[98] に合致している有り様は以上の通り［まったく合致していないの］である。しかし，あらゆるものごとは必然的に生じると論じる人々によって，許容的なものごと（τὸ ἐνδεχόμενον）やどちらでもよい仕方で（ὁπότερ’ ἔτυχεν）生じるものごとがあることもまた否定されることは，次の事実から即座に明らかである[99]。すなわち，許容的に生じると第一義的に言われるものごととは，それらについて生じないことが許容される余地もあるようなものごとのことである一方（「どちらでもよい仕方で」という言い方自体が明らかにしているように），必然的（ἐξ ἀνάγκης）に生じるものごととは，生じないことが許容されないものであるという事実である。私が「必然（ἀναγκαῖον）」と言うのは，強制によって生じるものごとについてではなく[100]（この意味にその名を修正してはならない），何らかのものどもによって自然本性的に生じ，それに対立することが生じえないであろうようなものごとについてである[101]。

［175.7］実際，次のように論じることがどうして奇妙ではなく，明白な事柄に反していないはずがあろうか ── すなわち，誰かが何らかの仕方で動かされたり［動いたり］自分自身のどこか一部分を動かしたりすることは，そのときその動きをしないこともできたような仕方では不可能であり，むしろ，たまたま首を回したり，指をどれか伸ばしたり，瞼を上げたりするなどといったことも，何らかの主導的な諸原因に随伴するのであって，いかなるときに

---

[98] この箇所の τὰ κείμενα の意味については，Sharples と Natali の訳に倣った。

[99] アリストテレス『カテゴリー論』12b38-13a4，『命題論』18b5-9, 19a7-22 他。

[100] アリストテレス『形而上学』1015a26-33, 1072b11-13。

[101] 底本とともに <ἂν> εἴη と挿入（Bruns）。

もわれわれが他の仕方で[102]生じさせることはできない，ということになるほどにまで必然が及んでいる，などと論じることが。しかも，そう論じる人々が，存在したり生じたりするものごとの間に事柄の差異が多く存在するということ（その差異から，あらゆるものごとがそのような原因によって縛られているのではないことを学ぶのは容易であったはずなのに）を見ているのであれば，なおさらである。

［175.16］実際われわれが見るとおり，存在するものごとには，現在の有様と対立する有様に変化する可能性（δύναμις）をまったく有しないものごとと，現在の有様に劣らず[103]対立する有様にあることが可能なものごととがある。例えば火は，その生来的な熱とは反対の冷を受け入れることはできず，雪は，雪としてとどまりながら熱を受け入れることはできないが，水は，冷たい場合であっても，その冷を失って冷とは反対の熱を受け入れることが不可能ではない[104]。同じように次のこと[105]も可能である。すなわち，座っている者が立つことも，動いている者が静止することも，話している者が黙ることも可能であり，その他数多くの事例について，反対の有様を受け入れる可能性が内在しているのを人は見出しうるだろう[106]。そして，必然的に相対立する有様のうちの一方の有様にあるものごとは，現在の有様とは反対の有様を受け入れる可能性を有しないのであれば，それと反対の有様も受け入れるものごとは，必然的に現在の有様にあるわけではないことになるだろう。そして，もし必然的にではないならば，許容的にということになるだろう。

［175.27］許容的に何らかの有様にあるものごとは，必然的にではなく許

---

[102] 写本には ἀλλ᾽ ὡς とあるが，底本とともに ἄλλως と読む（Schwartz）。

[103] テクストには οὐδὲν μᾶλλον とあるが，Sharples の注に従って οὐδὲν ἧττον の意味で解する。

[104] アリストテレス『カテゴリー論』12b37–41，『命題論』22b38–23a3，『生成と消滅について』330b3–5。

[105] 底本とともに τούτῳ ではなく τοῦτο と読む（Bruns）。

[106] アリストテレス『カテゴリー論』12b12–15，『トポス論』102b7–8, 20–26, 128b20–21，『生成と消滅について』337b7，『形而上学』1047a15–29。

容的にその有様になったことによって，現在その有様にあるのである。また，許容的に何らかの有様になったものごとは，その有様にならないこともありえたのである。というのは，こうしたものごとの各々が現在たまたまその有様にあるのは，それが相対立する有様のうちの[107]どちらの有様にもありえたからであるが[108]，端的に（ἁπλῶς）[109]必然的に現在の有様にあるわけではないのは，対立する有様にありうる可能性のゆえなのである。しかしながら，このような仕方で［許容的に］何らかの有様にあるものごとは，必然的にそうした有様へと導く何らかの先行原因によってその有様にあるのではない[110]。したがってもし，相対立する有様をどちらも同様に受け入れるものごとが，すべて許容的に現在の有様にあったりなかったりするのであれば，許容的に存在したり生じたりするものごとは数多くあることになるだろう。

［176.9］というのは，現在の有様と反対の有様を受け入れないものごとと，いかなる時点でも現在の有様とその反対の有様とをいずれとも劣らず受け入れるものごととの，その両方を同じように[111]必然的にあると主張するのは，奇妙だからである。なぜなら，必然的に何らかの有様にあるものごととはそれと反対の有様を受け入れないもののことである以上，反対の有様を受け入れるものごとは必然的に現在の有様にあるのではないことになるからである。

X［176.14］さて[112]，次の点によって，あらゆるものごとが運命に即して生

---

[107] 写本には αὐτῶν ἀντικειμένων とあるが，底本とともに αὐτὸ τῶν ἀντικειμένων と読む（Sharples）。

[108] Thillet は διότι <ἀδύνατον> ἦν と挿入し（*quia impossibile erat in altero* lat.），「それら相対立する有様のうちの一方の有様にあることが不可能であったから」と読むが，文脈に合わない。

[109] Sharples は，ここでは「端的な必然性」という考え方は語られていないとの解釈から，「端的に」は「必然的に」にではなく「ある」にかけるべきであると論じている（Zierl も同様）。これに対して Natali は，「端的な必然性により」と解している。

[110] 底本とともに τε を削除（V^2 lat. a^{12}）。

[111] Sharples は，この「同じように」は「必然的に」ではなく「主張する」にかけるべきであると論じているが，「ある」にかけることも可能であろう。

[112] 以下の文章の構造については，Sharples および Natali の理解に従う。

じるとしても可能で許容的なものごとは否定されないと論じることは ── すなわち，(i)生じることが何ものによっても妨げられないものごとは，たとえ［実際には］生じないとしても，生じることが可能であり[113]，(ii)運命に即して生じたものごとと対立するものごとが生じることは妨げられた[114] わけではなく（それゆえ，［実際には］生じないとしても［生じることが］可能である），(iii)そうした［運命に即して生じたものごとと対立する］ものごとの生じることが妨げられなかったということは，それを妨げるものごとが，たとえ絶対的には存在するとしても，われわれには知られていないことから証明される[115]（実際，彼らが主張するように状況が同じであれば対立するものごとが生じることは不可能であるのだとすると，そうしたものごとと対立するものごとが運命に即して生じることの原因は，そうしたものごとが生じなかったことの原因でもあることになる。しかしながら，存在するものどもの内にはわれわれには知られていないものがあり，それゆえそうしたものごとが生じること[116] は妨げられていない，と彼らは言うのである）── しかし，このように論じることは，冗談が求められていない議論の場において冗談を言っているような行いではなかろうか。なぜなら，われわれが知らないということは，その物事が存在するか存在しないかということとは何ら関係がないからである[117]。彼らの考えにしたがうと可能なものごとはわれわれの知識の如何に

[113] この(i)は，ストア派の（おそらく）クリュシッポスによる，以下の可能様相の定義を念頭に置いたものと考えられる。「可能［な命題］とは，真であることを受容可能であり，真であることを外的なものが妨げていないもののこと」（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』7.75＝*SVF* II.201，ボエティウス『アリストテレス「命題論」註解』II.234.27–235.1＝*SVF* II.201，他にキケロ『運命について』13＝*SVF* II.954，プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1055e–f＝*SVF* II.202 も参照）。しかし，以下の(iii)に見られるように可能様相を認識相関的なものとして捉える見解については，それがストア派（特にクリュシッポス）に由来するものであるかどうかをめぐって解釈が分かれている（詳細は Bobzien 1998: 131–136 を参照）。

[114] 写本には κεκώλυται とあるが，底本とともに κεκωλῦσθαι と読む（Usener）。

[115] 底本とともに ἂν を削除（V^2 a^{12}）。

[116] 底本とともに μὴ を削除（Bruns）。

[117] アリストテレス『命題論』18b36–19a1。

よって存在することになる，というように彼らが論じているのは明らかである。というのも，それが妨げられたことは知っているがそれを妨げたものを知らない者たちにとっては可能であるものごとが，その原因を知ることができる者たちにとっては（予言者がこれにあたるだろう[118]）可能でないものごとになってしまうだろうからである[119]。

［177.2］また彼らは，上述の仕方で可能なものごとの本性を確保することによって，運命に即して生じるものごとは，そうしたものごとに対立するものごとも生じることが可能 ── この「可能」とは，前述の意味での「可能」であるが ── であるがゆえに，そこから不可避的に生じはするものの必然的に生じるのではない，と主張する。しかし先に言ったように，これは学説を擁護する人々のすることではなく，冗談を言っている人々のするような行いである。

［177.7］これと同様の［誤った］議論として，次のものがある[120] ──「明日海戦があるだろう」という命題（ἀξίωμα）[121] は，真ではあるが必然（ἀναγκαῖον）[122]

---

[118] ただし，ストア派のクリュシッポスは，卜占術によって知られるのは未来事象の徴証であって原因ではないと論じていたと考えられる（キケロ『運命について』11-15＝*SVF* 2.954 と Bobzien 1998: 144-179 の解釈を参照）。

[119] Zierl に従い，οὐκ ἔσται δυνατὰ <τὰ> ὄντα δυνατὰ τοῖς [δυνατοῖς V] εἰδόσιν μὲν αὐτὰ κεκωλυμένα [κεκωλυκέναι V], ἀγνοοῦσιν δὲ ὑφ’ ὧν κωλύεται [ὑφ’ ἡμῶν κωλύοντες V]と読む（Sharples 2001: 542 n.211 も参照）。底本は，οὐκ ἔσται δυνατὰ τὰ ὄντα δυνατὰ τοῖς εἰδόσιν μὲν αὐτὰ κεκωλῦσθαι, ἀγνοοῦσιν δὲ ὑπὸ τίνων κωλύονται と読んでいる（Langerbeck）。

[120] 以下，アリストテレス『命題論』9 章における「海戦問題」に基づいた，難解な議論の応酬が続く。「明日海戦があるだろう」といった未来命題の真理とその命題が語る未来事象の必然性との関係について，この箇所からアレクサンドロス自身の何らかの見解が読みとれるか，あるいは単に運命論者の前提を受け入れた上でのアド・ホミネムな議論とみなすべきかをめぐって，解釈が分かれている（詳細は Gaskin: 1993 を参照）。なお，この問題に関する別の議論が，アプロディシアスのアレクサンドロス（？）『問題集』I.4 に見られる。

[121] ἀξίωμα は現代論理学における「命題（proposition）」とは必ずしも重ならないことが指摘されるが，読みやすさを考えて「命題」と訳した。

[122] 以下，「必然（ἀναγκαῖον）」と「必然的に（ἐξ ἀνάγκης）」との二つの表現の区別が導入さ

でもあるわけではない，ということがありうる。というのは，必然（ἀναγκαῖον）であるのは常に真であるもの[123]であるが，その命題は，海戦が生じたときには，もはや真であるままとどまっては[124]いないからである。だが，もしその命題が必然（ἀναγκαῖον）ではないならば，その命題によって意味されていること ── すなわち，海戦があるだろうこと ── もまた，必然的に（ἐξ ἀνάγκης）［海戦があるだろう］というわけではないことになる[125]。だが，もし［海戦が］あるだろうけれども必然的に（ἐξ ἀνάγκης）［海戦があるだろう］というわけではないならば[126]（というのも，海戦があるだろうということは真であるが，必然的に（ἐξ ἀνάγκης）ではない[127]から），許容的に［海戦があるだろう］ということになるのは明らかである。だが，もし許容的に［海戦があるだろう］ならば，あらゆるものごとが運命に即して生じるということによって許容的に生じる[128]ものごとがあるということは否定されないことになる。──

［177.14］これもまた，先述の議論と同じようなものである[129]。すなわち，冗談を言っているに過ぎず，自分の言っていることが分かっていない者のする議論に他ならない。実際，必然（ἀναγκαῖον）であるものが永遠である一方[130]，必然的に（ἐξ ἀνάγκης）生じるものごとはまさにその生じる［生成する］ということによってそのようなもの［永遠＝必然（ἀναγκαῖον）］であることを

れていると考えられるため，混乱を避けるために原語も一々付記する。

[123] Sharples 2001: 572 n.405 は，「常に真であるもの」は「必然」の十分な規定として提示されたものではないと注記している。

[124] 写本には μὲν とあるが，底本とともに μένει と読む（Usener）。

[125] 写本には τὸ ἐξ ἀνάγκης とあるが，底本とともに ἐξ ἀνάγκης τὸ と読む（von Arnim）。

[126] 写本には ἀνάγκης ἀληθές とあるが，底本とともに ἀνάγκης δέ と読む（von Arnim）。

[127] Sharples は「『必然的に［海戦があるだろう』は真］ではない」と補っている。あるいは「［『海戦があるだろう』は］必然的にではない／必然的に［真］ではない」か。

[128] 写本には γενέσθαι とあるが，底本とともに γίνεσθαι と読む（von Arnim）。

[129] 底本とともに <ὅμοιον τῷ προειρημένῳ>· ὁμοῦ γὰρ と挿入（Bruns）。あるいは，Zierl のように ὁμοῦ μὲν と読み，「これもまた，冗談を言っているに過ぎず……」と解すべきか。

[130] アリストテレス『生成と消滅について』337b29-338a3，『動物の諸部分について』639b23-24，『ニコマコス倫理学』1139b23-24。

妨げられているとすれば[131]，必然的に（ἐξ ἀνάγκης）生じるものごとのすべてが必然（ἀναγκαῖον）であるわけではないことになるし，また，そのこと[132]を語る命題もまた，やはり必然（ἀναγκαῖον）ではないことになる ── もしその命題によって意味されたことがそのようなもの［必然（ἀναγκαῖον）］ではない[133]とすれば（なぜならわれわれは，必然（ἀναγκαῖον）であるものごと[134]を含む命題のすべてを，必然（ἀναγκαῖον）であると言うわけではないからである[135]。というのも，必然（ἀναγκαῖον）命題の基準はこのような点にあるのではなく，偽から真へと移行することが不可能であるという点にあるから）。

［177.21］したがって，「明日海戦があるだろう」といった類の[136]命題は，必然（ἀναγκαῖον）ではないとしても，真であることを妨げられてはいない。というのも，［この命題が］必然（ἀναγκαῖον）として言われるならば[137]［＝「明日海戦があるだろうことは必然（ἀναγκαῖον）」と言われるならば］，たしかに「必然（ἀναγκαῖον）」という付加のために真ではなくなるが，「必然的に（ἐξ

---

131 この前提に従えば，帰結は「生じるものごと ── 必然的に（ἐξ ἀνάγκης）であろうとなかろうと ── はすべて必然（ἀναγκαῖον）ではないことになる」という全称否定になるはずであるが，実際は部分否定となっている。Gaskin 1993: 80 n.30 はこの部分を，「実際，必然であるものが永遠であるならば，必然的に生じるものごとのすべてが必然であるわけではないことになる。そのうえ実際，必然的に生じるものごとはまさにその生じる［生成する］ということによってそのようなもの［永遠＝必然］であることを妨げられているのである」と訳しているが，テクストの自然な読みとは言い難い。

132 「そのこと」の指示対象を，Sharples は「必然的に生じるものごと」と，Gaskin 1993: 85 は「明日海戦があるだろう」という命題ととっている。

133 写本には τὸ μὴ とあるが，底本とともに μὴ τὸ と読む（Lond. O.）。

134 議論上は「必然的に［生じる］ものごと（τὸ ἐξ ἀνάγκης）」が求められるところか（Sharples, Gaskin 1993: 80–81 n.32）。

135 写本には εἴ γε μὴν とあるが，底本とともに λέγομεν に修正（Rodier）。

136 ὡς の解釈については Gaskin 1993: 85 n.41 の提案に従う（ただし Gaskin 自身は最終的に ὡς を削除する）。底本とした Sharples も ὡς を保持しているが，「［必然的に生じるものごとを語っている命題は］……「明日海戦があるだろう」という命題と同じように（ὡς），真であることを妨げられていない」ととっている。

137 写本には γινόμενον とあるが，底本とともに λεγόμενον と読む（Bruns）。

ἀνάγκης)」という付加によって必然（ἀναγκαῖον）になる[138]のではないとすれば，[「必然的に（ἐξ ἀνάγκης）明日海戦があるだろう」と言われるとしても][139]この［「必然的に（ἐξ ἀνάγκης）」という］付加なしに言われる場合と同じように真であるままとどまる[140]からである。しかし，もしその命題[141]が真であるならば，明日になれば「必然的に（ἐξ ἀνάγκης）海戦が生じた」という命題が真になるだろう。そして，もし必然的に（ἐξ ἀνάγκης）［生じたの］ならば，許容的に［生じたの］ではないことになる。

［177.27］そして実際[142]，もしあらゆるものごとが運命に即して生じるとするならば，「明日海戦があるだろう」が真である場合，運命に即して海戦が生じるということが常に成り立っていることになるだろう。しかし，運命に即してであれば不可避的にであり，また[143]，不可避的にであれば生じないことは許容されず，さらに，生じないことが許容されないものごとは生じないことが不可能なのである。そして，生じないことが不可能であるものごとについて，どうしてそれが生じないことも許容されると言うことができるだろうか。というのは，生じないことが不可能であるものごとは，生じることが必然（ἀναγκαῖον）[144]だからである。よって，彼らの考えにしたがえば，運命に即して生じるものごとはすべて必然的（ἐξ ἀνάγκης）にあるだろうことになるのであって，彼らが冗談で論じているように，許容的にもあるだろうなどということにはならないのである。

---

[138] 底本とともに写本通り γίνοιτο と読む。

[139] Sharples, Gaskin 1993: 85 の理解に従って補足。

[140] この「とどまる」は時間的な意味ではないと考えられる。

[141] 底本とともに写本通り τοῦτ’ と読む。Bruns は τότε と改変し「もし［その命題が］そのとき真であったならば」と読んでいる。

[142] Gaskin 1993: 92 は，この καὶ γὰρ を「またさらに（And besides）」と解し，ここから新たな議論が始まるとする。

[143] 底本とともに δ’ を挿入（lat.）。

[144]「必然的（ἐξ ἀνάγκης）」と区別されない通常の用語法に戻っていると思われる。

【文献】

底本

［Sharples］Sharples, R. W., *Alexander of Aphrodisias: On Fate* (London, Duckworth, 1983).

他の校訂版・翻訳・注釈

［Bruns］Bruns, I., *Supplementum Aristotelicum* II.2 (Berlin, Reimer, 1892).

［lat.］Thillet, P., *Alexandre d'Aphrodise: De fato ad imperatores*: Version de Guillaume de Moerbeke (Paris, Vrin, 1963).

［Magris］Magris, A., *Alessandro di Afrodisia: Sul destino* (Firenze, Ponte alle Grazie, 1995).

［Natali］Natali, C. & Tetamo, E., *Alessandro d'Afrodisia: Il destino*, Seconda edizione riveduta (Sankt Augustin, Academia Verlag, 2009).

［Thillet］Thillet, P., *Alexandre d'Aphrodise: Traité du destin* (Paris, Les Belles Lettres, 1984).

［Zierl］Zierl, A., *Alexander von Aphrodisias: Über das Schicksal* (Berlin, Akademie Verlag, 1995).

略号

［DK］Diels, H. & Kranz, W. (eds.), *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 3 vols. (Berlin, Weidmann, 1951–19526).

［SVF］Arnim, H. von, *Stoicorum Veterum Fragmenta*, 3 vols. (Leipzig, Teubner, 1903–1905).

研究文献（注で参照したもののみ）

［Bobzien 1998］Bobzien, S., *Determinism and Freedom in Stoic Philosophy* (Oxford, 1998).

［Chaniotis 2004］Chaniotis, A., 'Epigraphic evidence for the philosopher Alexander of Aphrodisias', *Bulletin of the Institute of Classical Studies* 47 (2004), 79–81.

［Donini 1987］Donini, P. L., 'Aristotelismo e indeterminismo in Alessandro di Afrodisia', in J. Wiesner (hrsg.), *Aristoteles: Werk und Wirkung, Paul Moraux gewidmet* (Berlin/New York, De Gruyter, 1987), II, 72–89.

［Fortenbaugh 1984］Fortenbaugh, W. W., *Quellen zur Ethik Theophrasts* (Amsterdam, 1984).

［Gaskin 1993］Gaskin, R., 'Alexander's Sea Battle: a discussion of Alexander of Aphrodisias *De Fato* 10', *Phronesis* 38 (1993), 75–94.

［Mansfeld 1988.1］Mansfeld, J., 'Diaphonia: the argument of Alexander *de fato* chs. 1-2',

Phronesis 33 (1988), 181–207.

［Mansfeld 1988.2］ Mansfeld, J., review of R. W. Sharples, *Alexander of Aphrodisias: On Fate, Mnemosyne* 41 (1988), 416-419.

［Montanari 1980］ Montanari, E., Review of Todd 1976, *Annali della Scuola normale superiore di Pisa. Classe di lettere e filosofia*, Ser. 3, Vol. X, 4 (1980), 1438-1449.

［Rossetti 1980］ Rossetti, L.,. 'Ricerche sui 'Dialoghi Socratici' di Fedone e di Euclide', *Hermes* 108 (1980), 183-200.

［Sharples 2001］ Sharples, R. W., 'Determinism, Responsibility and Chance', in P. Moraux, J. Wiesner (eds.), *Alexander von Aphrodisias* (Berlin, 2001), 513-592.

［Sharples 2005］ Sharples, R. W., 'Implications of the new Alexander of Aphrodisias inscription', *Bulletin of the Institute of Classical Studies* 48 (2005), 47-56.

［Todd 1976］ Todd, R. B., *Alexander of Aphrodisias on Stoic Physics: A Study of the De Mixtione with Preliminary Essays, Text, Translation and Commentary* (Leiden, Brill, 1976).

［Zago 2012］ Zago, G. 'Contributi critici al testo del *De fato* di Alessandro di Afrodisia', *Rheinisches Museum für Philologie* 155 (2012), 364-388.

［納富 2005］ 納富信留『哲学者の誕生 ── ソクラテスをめぐる人々』ちくま新書，2005